2021

LA NOUVELLE

№27
AUTOMNE

東京外語仏友会
〒 113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト　東京外語会気付
発行責任者　藤倉洋一（1970/ 昭 45）
2021.10.1 発行

第 25 回仏友会総会

第 25 回仏友会総会は、本来は昨年 4 月に開催するはずだったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため 11 月に延期を模索。ところが、コロナ禍の状況改善がみられないことから、再延期して本年 4 月 25 日に実施する運びとなった、「難産」の総会である。開催の是非や形式についても、たくさんの議論があった。そもそも、互いに顔を合わせてフランスワインのグラスを傾けながら旧交を温めるスタイルが取れないのであれば、開催する意味がないとの意見も多かった。一方で、いつになるかわからないコロナ禍の収束をあてにしてこのまま延期を続けてよいのか、せめてオンライン総会だけでも開催すべきではないかとの意見も根強いものがあった。そこで生まれたのが、会場直接参加とオンライン参加を併せたハイブリッド方式での開催案だった。

会場直接参加にあたっては、三密を避けるため十分な配慮をし、80 名は収容できる大手町サンケイプラザの会議室（室料はこれまでの経緯もあり、破格の割引付き）にわずか 12 名が出席（うち、半分近くは幹事）。仏友会恒例の懇親会もなしとした。一方、オンライン開催については、何しろ仏友会としては初めての体験のため不安はあったが、たまたま私が仕事で毎週のように Zoom 会議を行っていた関係で、思い切って今回の運行係を申し出ることにした。結果的には、オンライン参加者は 44 名で、会場直接参加組と合わせると 56 名となり、従来の仏友会総会と同程度の規模となった。

とはいえ、いざオンラインで開催してみると、普通の Zoom 会議の設定とは異なる点が多々あり、思わぬトラブルも発生してしまった。ホスト側から一方的に情報を伝えるだけのウェビナー方式であれば、視聴者のマイクとカメラ機能を強制的にオフにして始めるのだが、今回は自主的にオフにしていただくようお願いするにとどめていた。ところが、Zoom に慣れていない方も多く、視聴者のマイクの音声が入ったり、デスクトップの画像が共有されて映り込んだりといったハプニングも発生。また、集合写真撮影にあたっては、Zoom 参加者を 2 グループに分けて画面ショットを撮影したのだが、どこまで撮影が済んだのかわかりにくかったため、思いのほか手間取ってしまった。今から考えると、卒業年次順に分けておいたほうがよかったかもしれない。終了後のアンケートでは、心優しい会員の皆様から 5 点満点中 3.9 点の及第点の評価をいただいた。次回またオンラインでの開催が必要になった場合には、今回の教訓を生かしたい。

当日の流れでは、藤倉会長の挨拶と金澤副会長の会務報告は会場から発信。富田幹事による会計・監査報告と、川口先生による母校の近況報告はリモートでいただいた。その後の講演も、本学准教授のジェローム・ル ボワ先生から Zoom 越しに発表していただいた。大変好評で、時間が足りず質問のすべてにはお答えいただくことができなかったので、講演の追録の形で本号にご本人からの原稿を掲載させていただく。

（幹事　中村日出男　昭 49）

異文化論について

Jérôme LE BOIS（東京外国語大学准教授）

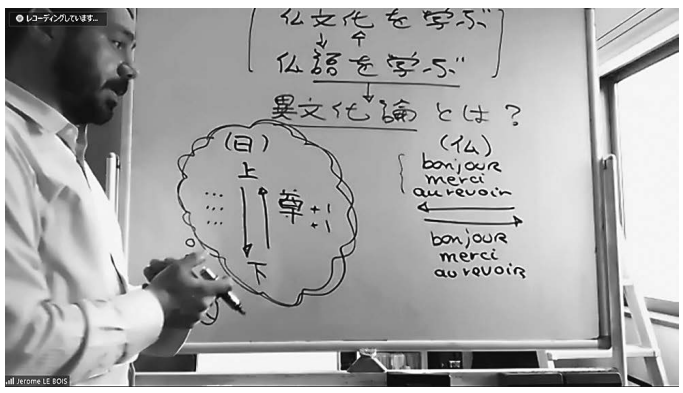
この度、4 月 25 日の仏友会総会の講演会では、異文化論について話しました。最近よく質問される言葉なのですが、異文化論とは実際は何を示しているかについて説明し、参加してくださった仏友会の皆様と一緒に考えました。とてもいい機会でしたので、まず私は皆様にお礼を申し上げたいと思っております。

外国語を学んでいる人たちにとって、きっかけはそれぞれ違っても、誰もが最初に体験するのはカルチャーショックでしょう。例えばフランスの場合は、日本と比べたら考え方や思想やライフスタイルなどが異なっており、いくらフランス語が上手になっても、分かり合えない、うまくコミュニケーションを取れないケースは多いでしょう。その理由から、異文化論が生まれました。

皆様はもうご存知だとは思いますが、フランス語を理解するのと、フランス人を理解するというのは、別の問題だと言えるでしょう。フランス語教育学者は元々、フランス語を教えられたらフランスの豊かな文化（歴史、文学、美術など）を教えられると考えました。しかしながら改善する方法があると気づき、異文化論について考え始めました。なぜなら、言語だけでなく、フランス人の考え方または社会を同時に教えないと、うまくコミュニケーションが取れないと気づいたのです。

例えとして、コンビニでの客と店員のやり取りをもう一度語りましょう。日本では、入る時、支払う時、出る時にお客様は基本的に無言なのに、バイトさんは頑張っていろいろ尊敬語で話しかけます。フランスでは、丁寧の御三家である Bonjour、Merci、Au revoir と言われる上に、返さないと失礼になります。簡単に言いますと、一方の社会は垂直的な関係で、他方は水平的な関係だと言えます。どちらが良いか悪いかに関係なく、考え方の違いが存在するのです。そのことを知らず、その言葉を使えるのにいつ使うべきか分からないと、一生懸命フランス語を勉強しても意味がなくなるでしょう。残念ながら、その異文化の説明は基本的教科書には載っていません。

私は、東京外国語大学の講師として、フランス語の教え方に異文化論を加えるべきだと思い、作戦を変えました。フランス語を学んでから、フランスの文化を学ぶのではなく、同時にフランスのことを教えないといけないと思いました。ですが、どうすればいいのでしょうか。まず、ある問題が生じたら、その問題について論理的に考えましょう。フランス人と日本人の考え方やライフスタイルがそんなに異なる理由はなんでしょう？理由はやはりいくつかありますが、まずは地理のことを考えたほうが分かりやすくなるかもしれません。フランス人を理解するには、まずはフランスという国を理解することが必要です。例えば、面積と総人口の割合を比較すれば、その差があれば考え方や生き方が違うと考えられるでしょう。地理が断然異なれば、文化の違いもたくさんあるでしょう。地方や民族的な多様性、教育制度、家族構成、仕事との関係、社会問題などについても、言語の授業をしながら話すことが不可欠になるでしょう。こうして、異文化論を含めた新たなフランス語の教え方が生まれました。



講演中のル ボワ先生

講演会では、たくさんの意見や質問があり、改めて異文化論の大切さが伝わりました。正直に言いますと、テーマの取り上げ方は実際の授業とあまり違いはありません。やはり異文化論の存在を理解してもらうために、皆様の経験や興味のあることなどを紹介すべきだと思いました。

講演会で皆様からいただいた以下の質問にお答えします。

「異文化論について書かれた本はありますか」：たくさん書かれてはいますが、国と国との違いがポイントですので、フランスと日本の異文化論については少ないかもしれません。

「日本の家族を見ていて、フランス人にはどのように見えるのでしょうか」：家族は国によって形が変わっても、どこでも幸せのイメージを表すでしょう。先に述べましたが、良いのも悪いのも存在しません。ただ、考え方が違うだけです。

難しい点もたくさん残っています。学生たちに「当たり前だとずっと思っていたことが当たり前ではないかもしれません」と言うのは、ある意味で、やはりセンシティブなことでしょう。しかもフランス語を教えるのが最大の義務ですので、バランスを取るのは困難なのですが、少しずつ国と国との違いの存在に気づかせつつ、小さいことから説明をしています。徐々に学生たちの異文化理解力を上げられ、皆のフランス語とフランス文化への興味を強くさせることができれば、それが東京外国語大学のもう一つの誇りとなると信じたいと思います。

第 26 回サロン仏友会のお知らせ
（オンライン講演会）

総会に続き、サロン開催を模索してきました。しかし、新型コロナ感染拡大の勢いに衰えの兆しが見えません。残念ですが、会員が一同に会する懇親会は、皆が安心して集えるような条件が整うまでは当分持ち越し延期といたします。従って、この秋のサロンは以下の通り「オンライン講演会」という形で行います。インターネットをご利用できる方は是非ご参加ください。

日　時：2021 年 11 月 21 日（日）14:00 ～ 16:00（予定）
形　式：オンライン講演会（Zoom アプリ使用＝無料）
講　師：木崎賢治氏（1969/ 昭 44）音楽プロデューサー、（株）ブリッジ代表取締役

演　題：「好きから始まった僕の人生」

木崎氏は卒業後、渡辺音楽出版 (株) で、沢田研二、アグネス・チャン、山下久美子、大澤誉志幸、吉川晃司等の制作を手掛け、その後独立してキーズカンパニー (1988)、音楽出版社ブリッジ (1994) を設立。槇原敬之、福山雅治、BUMP OF CHICKEN 等数多くのアーティストとヒット曲を次々と生み出しました。また氏の著書「プロデュースの基本」(集英社インターナショナル) は業界の枠を超えた注目の一冊です。

豊かな経験と現役の両視点から、音楽世界とそこに関わる人々の様々な心情にも触れたお話が期待されます。

申　込：◆仏友会の諸案内をメールで受けられる会員には改めてご案内いたします。
◆その他の会員及び会員未登録の方は 11 月 13 日 (土) までにメールでお申し出ください。

（担当：山崎るり子　ruche_blanche@yahoo.co.jp ）

Zoom 参加者集合写真 1

Zoom 参加者集合写真 2

会場参加者集合写真

仏友会会計報告（内部監査済み）

（2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日、単位：円）

収　入		支　出	
前年度繰越金	879,860		
総会会費	0	総会費用	0
受取通信費	197,000	「LA NOUVELLE」発行費用	122,366
サロン仏友会会費	0	サロン仏友会費用	0
		大学語劇お祝い金	0
寄付金	0		
		ゆうちょ銀行振替手数料	11,916
通常貯金利息	6	雑費	304
合計	1,076,866	合計	134,586
次年度繰越金	942,280		

◇藤倉会長が 6 月 22 日（火）に急遽脳梗塞で入院され、現在は埼玉県内のリハビリ病院に転院されて療養継続中です。当面、金澤副会長が会長代行として幹事会をとりまとめてまいります。幹事一同、藤倉会長の一日も早い回復を祈念しております。

◇長らくご愛読いただいている坂井英俊さん（1965/ 昭 40）の連載記事「昔日の青春 佛友會々報　80 年のタイムカプセルを開ける」につきましては、坂井さんご入院中のため、今回は臨時に吉田尚子幹事と三浦房子幹事の記事を掲載します。

≪パリ便り≫

できることから一歩ずつ

諸橋　淳（1995/ 平 7）

私が国連教育文化科学機関（ユネスコ）に勤務するようになって今年で 22 年になります。20 世紀の終わりに、若手邦人職員を育てることを目的とした日本政府のプログラムに応募し、ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）としてユネスコのパリ本部に派遣されてから、その後正規職員となり、ハイチ、タイ勤務を経て、昨年再び本部へ戻ってきました。留学を含めると私の海外生活はこれまでの人生の半分を超えました。特にフランスは私を育ててくれた第二のホームグラウンドともなっています。

実は、今にして思えば、高校 3 年時にあまり深く考えずにフランス語学科を受験したことで、私の後の運命が決まってしまったようなものです。英語はもう受験でとことん勉強してしまったし、どうせなら他の言葉がいいな、フランスって何となく心惹かれるなという程度の軽い気持ちで入学したため、当初は全く授業についていけず、興味も持てず、深く後悔したことを覚えています。しかし外語祭の演劇（モリエールの「病は気から」でした）や大学の友人たちと行ったフランス旅行を通して、フランス語の美しさや楽しさを体感することができ、縁あって学部 3 年の時にはアンジェに留学するまでとなりました。

フランス人や旧植民地出身の学生、世界各地から集まってきた留学生たちと刺激に満ちた共同生活を送る中で、私のフランス語スキルもようやく開花しましたが、その時に肌で感じた「多文化共生」というテーマは今日の私の仕事の原点になっています。実は、子供たちにフォーカスしたユニセフ（国連児童基金）で仕事をしたかったのですが、当時私を JPO として採用してくださった選考委員の方に、「あなたはフランス語畑だし、文化的なことに興味があるのなら是非ともユネスコに行きなさい！」と言われました。それから、22 年、本当にたくさんの人たちと出会い一緒に仕事をさせていただいてきました。

さて、私が勤務するユネスコの憲章（1945）は、「戦争は人々の心の中で生まれるものであるから、人々の心の中に平和の砦を築かなければならない」とうたっています。知識人、科学者、文化人を動員し、国家間や文化間の協働によって平和を目指すという、時間のかかる成果物を追い続けるのがユネスコの使命です。我々の地球社会は、温暖化やエネルギー問題、紛争による難民の受け入れなど、環境、経済、社会面で既存の国家の枠組みを超える数々の地球規模の問題群に直面しています。2015 年に採択された国連持続可能な開発目標（SDGs）の 4 番目の目標にもありますが、教育の力で、人類共通の課題解決に向けて積極的に行動できる未来のリーダーたちを育てることが今強く求められており、私も微力ではありますが、加盟各国と協働しながら、教育カリキュラムや教職員教育、教材や教育方法の見直しなどにも携わってきました。大きなシステムが相手なので短期間で成果を生むことは非常に難しいのですが、それでも、ユネスコの理念に共感し、リーダーシップを発揮してくださる諸国の教育大臣、政策担当者、教育関係者、若い人たちと一緒になって問題解決に取り組み、できるところから形にしていくという作業は何物にも代えがたい充実感があります。とあるプロジェクトで出会ったパキスタンの中学の校長先生の言葉が心に響きました。「世界は広いけれど、自分たちは様々な理由から外に出ていく機会を持ててこなかった。でも、生徒たちにはもっと普段の生活圏と違う多様なものを目にしたり、多様な人々と関わるという経験をさせてあげたい」そういった場を作ることに少しでも貢献できればと願っています。

その一方で、無力感に襲われることもしばしばです。この原稿を書いている最中にも、かつて勤務したハイチが再び大地震の被害を受けました。ハイチは 2010 年の大地震の爪痕が今も残り、復興の遅れと不安定な政情が混乱に拍車をかけています。教育セクターのガバナンス強化、教職員免許法の確立に向けた土台作り、フランス語と合わせて、母語であるハイチクレオール語での教育の促進や、災害教育の強化などがユネスコの仕事でした。小さなオフィスは毎日フル回転で、ハイチ人スタッフ達と協力しながら、他の開発パートナー機関の方々とも連携しつつ、教育省にほぼ毎日通い詰めるという密度の濃い日々を送りました。2 年という短い期間でしたが、祖国を立て直し、生活の質を高めようと日々必死に戦っているハイチの方にたくさん出会いました。そのように既に厳しい状況の中で、再び多くの人の命や家、学校が奪われてしまったことに言葉もありません。

コロナ禍、紛争、自然災害、毎日のように世界中から悲しく受け止めがたいニュースが飛び込んできます。我々にできることは限られているのかもしれませんが、目をそらさず、できることをひとつずつやって行くんだという思いです。

上石神井から西ケ原へ

会津　洋（1954/ 昭 29）

昭和 25 年、今から 71 年前に私は外語に入学した。かりに昭和 55 年入学の方なら、71 年遡ると明治 44 年に当る。そんな昔の話を今更と思うが、私の生命の尽きぬ限り消え難い軌跡なのでしばらくお付き合い願いたい。

その頃外語はすでに新制大学になっていたが、二期校（他に横浜国立大など）だったので、一期校不合格者でも受験できた。私も一期校の一橋大学に入り損ね、外語フランス科に拾われた。同期生約 25 名（うち女子 1 名）、旧制高校生や軍関係校からの入学者も多かった。校舎は東京美術学校の借り校舎で木造、西武線上石神井駅から徒歩 10 分ほど、道筋に草野心平宅があったのを思い出す。さてフランス科教授陣は、永井順、鈴木健郎、家島光一郎、新里榮造の 4 人であった。入門授業では永井先生が、机の間を回り、私たちは動詞の活用を暗誦させられた。上級に進むと先生は「仏演劇と社会」の講義をされたが、同時に全学の就職対策の担当でもあり、講義時間の大半を割いて厳しい社会情勢の訓話をされることもあった。

昭和 25 年秋から朝鮮戦争が始まって、皆アルバイトに精を出さざるを得なかった。最も厳しい代わり割の良い仕事として、朝鮮で戦死した米兵の遺体洗浄に浦賀に行ったフランス科生もいた。私のバイトはもっと楽で中央郵便局で在日米人に届く郵便宛名の和名書き添えの仕事を他科の仲間と二冬した。

二年生になると北区西ケ原の新木造校舎に移った。その頃タイプライターが普及したせいか、タイプの自習室が二つ設置され、私も練習に励み、これが後で卒論の清書に役立った。フランス語科の授業はむろん語学技能修練にあったが、外務省出身の沢田節蔵学長の提唱と聞いているがエリア・スタディーズ（地域研究）が推進された。昭和 28 年頃には語文専攻と国際事情専攻の区分が生まれ、取得教養科目に差が生じた。これは今の言語文化学部、国際社会学部構成のはしりであった気がする。昭和 30 年前後は就職戦線が厳しく、大半の同級生は 1 年留年して状況改善を待った。

さてフランス語科の授業内容に触れよう。家島先生は文法の授業、永井、鈴木、新里先生は講読担当で、モーパッサンやメリメの短編、モーリアックの小説を習った。鈴木先生が仏作文を担当されたのは珍しく、またフランス語科専任ではなかったが、倫理学を持たれた串田孫一先生（暁星中学校 / 旧制東京高等学校 / 東京帝大文学部哲学科卒）とは授業以外で親しくさせていただいた。初めてのフランス人講師が 3 年次に着任し、会話・作文担当になった。あるとき各自が提出した小作文が点検される際、私のがお粗末だったのか、先生に授業中面前でビリビリ破られたのにはビックリ、うろたえた。また、先生は別な折、自身のワイシャツのポケットがインクのシミで汚れていると気付かされるとハサミを借りて、これまたその場でジョキ、ジョキ。フランス人の中には、不本意なことは人前構わず処理する人もいると知った次第。その時の私には有害有益。その後、発奮して卒論は短いものだったがオール仏文で仕上げたものの、審査の家島先生にはご迷惑だったことだろう。フランス人講師はのちに交代し、武蔵関カトリック教会神父ウッサン師が着任したが、永井先生はこのかたが Tours 辺りの出身で端正な発音をされるのでよく習うようにと訓戒された。外語に入る前、アテネ・フランセでフランス人の授業を聞いた私もフランス語に取り付かれた動機は発音の美しさであった。

同窓生の大半は昭和 29 年、30 年にかけて実社会に就職、大学院コースはまだなかったので、私ともう一人は都立大学大学院に進学した。紅一点の女性は高校の専任フランス語講師になったが、彼女がベルギーに仕事を得て渡欧した後、修士卒の私が引き継ぎ、高校、大学と 40 年間初級、中級のフランス語を担当し 70 歳定年を迎えた。その後また 20 年が経ち多少趣味の方に手を伸ばしているが、フランス語、フランス文化に長い年月浸された私の三つ子の魂は百まで届くだろうか、夢のまた夢である。

（早稲田大学名誉教授）

東京外語会寄附講義「キャリアデザイン論」

吉田尚子（1994/ 平 6）

2021 年 6 月 11 日の金曜日、外大の世界教養プログラム「キャリアデザイン論」で講義を行いました。卒業生が社会で得た体験や知見を語り、学生たちが自らの進むべき道について考える機会を提供するのが目的の講義です。こうした卒業生や社会人による講義は近年多くの大学で実施されているようで、実は私も群馬県立女子大学と宮城学院女子大学に講師として伺った経験があります。

外大の「キャリアデザイン論」は「東京外語会」が講師の手配一切を担っているため「寄附講義」とされているとのこと。俳句仲間の沢村智恵子さん（D・1982 ／昭 57）が外語会プラザに勤務されているご縁があり声をかけていただきました。

外国語を生かした仕事についているわけではないので学生の皆さんのニーズに合っているかどうか不安だったのですが、句集を出版していることは割と珍しい経歴なので独自の話が出来るかもしれないと思い、登壇をお引き受けしました。

今学期は，新型コロナウィルス対策のため Zoom 形式のオンライン授業とのことでした。キャンパス内の Wi-Fi 確保のため聴講している皆さんはビデオを停止しミュート状態。顔が見えず、リアクションがわからない状況で不安はありましたが、やってみたらマイペースで出来てかえって良かったように思います。講義の内容としては、学生時代の活動から現在に到るまでの経歴を語りつつ、それぞれの場面で学んだことを伝えました。たくさんのメッセージを入れ込みましたが、柱にしたのは日本語学を活用した人生論でした。学生時代に日本語学の授業で「修飾語と被修飾語のつながりを明確に」、つまり主語と述語の間に修飾語を入れすぎると何が言いたいかわからなくなる、と学んだことを色々な場面に応用したものです。

例えば手段の目的化。目標を達成するための手段なのに、その手段に重きを置いてしまいがち、という話を修飾語・被修飾語になぞらえて話しました。わが半生の大事な部分を占める俳句についても人生論をからめつつ大いに語りました。

前述の通り別の大学で講義した原稿はあるのですが、今回は日本語学を活用した話にするなどかなり外大生向けにリライトしました。講義終了後 19 ページにわたる感想をお寄せいただき、その方向は間違っていなかったと安心しました。

講義には上記のほか「“ そもそも ” を大切に」「正しいもの・美しいものに目を慣れさせましょう」などたくさんのメッセージを、さらには俳句の国際性、手紙の力、健康の大切さまで詰め込みました。個人差こそあれ、ほぼ全てのメッセージが誰かには伝わっており、現役外大生のアンテナの感度の良さに驚きました。特に日本語専攻の方々に「日本語を専攻していてよかった」と言っていただけたのが嬉しかったです。

原稿をリライトしている時、学生の皆さんからのリアクションを読んだ時、それぞれに大いなる学びがありました。稀有な体験が出来たご縁に感謝申し上げます。

◇◇◇